

行動障害のある人達への支援

自閉症、あるいは行動障害をとまなう利用者を中心に、地域にある乗馬クラブの清掃活動に取り組んでいる。清掃活動と乗馬クラブの親睦会から出発した地域との交流は、障害理解の広がりとともに、「共生」のひとつのあり方を示してくれたのではないかと感じている。

社会福祉法人 **南山城学園**

〒610-0115 京都府城陽市観音堂甲畑1-2

TEL：0774-54-4507／FAX：0774-55-2414／E-Mail：tsubasa@peach.ocn.ne.jp

【法人の概要】

法人設立年：平成40年2月

経営施設、事業（数）：7施設、17事業

経営施設、事業（種別）：

障害者支援施設…5／知的障害者デイサービス…1／障害者グループホーム…7／障害者就労移行事業所…1／障害者就業・生活支援センター…1／障害者総合相談支援センター…1／高齢者デイサービスセンター…1／居宅介護支援事業所…1／身体障害者デイサービスセンター…1／障害者生活支援センター…1／障害児（者）地域療育支援センター…1／介護老人保健施設…1／通所リハビリテーションセンター…1／老人居宅介護支援事業所…1／訪問介護ステーション…1／診療所…1

【法人の理念・経営方針】

- ・利用者の尊厳を守り幸福を追求する
- ・地域のニーズにパイオニア精神で取り組み「共生・共助」の地域づくりに貢献する
- ・いつでも誰もが安心して利用できる福祉サービスを創造する

実施施設の概要

施設名：社会福祉法人 南山城学園
障害者支援施設 翼

施設種別：障害者支援施設（生活介護事業＋施設入所支援事業）

活動開始年：平成11年7月

活動の頻度・時間：月16回（週4回）、1回あたり5時間 ※交流会「ムーンライトカーニバル」（年1回）

活動の対象者：利用者、乗馬クラブスタッフ・会員を中心とした地域住民

活動実施の背景、実施にいたった理由

「翼」は社会福祉法人南山城学園を経営主体とする障害者支援施設である。法人入所部門の機能分化推進の過程で、自閉症者を中心に行動障害を示す人など、障害特性への配慮と種々の個別支援を必要とする方々の暮らしを担う施設として、平成11年に開設された。また同時に、家庭養育や地域社会での支えが限界に窮するほどの、強い行動障害を表出させる方々の受け入れと支援の実践にも力を注いできた。強度行動障害とは、不適切な対応から形成された2次的・3次的な障害であるとされ、環境への著しい不適応を背景に、自傷、他害、異食、器物破損などが通常では考えられない高い頻度と強い形で出現し、養育や処遇が非常に困難な状態と定義される。利用者との日々に寄り添い、行動改善への試みを前進させながら、一方、支援の目指すべき方向は、施設での上手な営みを築くためのスキル獲得に止めるのではなく、あくまでも環境社会への主体としての参加を結実させることであるという考えから、地域での作業療育のあり方を模索し続けている。

実施内容

初めて乗馬クラブ「BRAVO」を訪ねたのは、「翼」開設から間もない頃であった。新しい住まいに移り、当時、作業・日中活動の場を求めていた私たちは、近隣の乗馬クラブの存在を知った。「馬小屋の掃除をお手伝いしましょうか」と声をかけたところから交流はスタートした。「BRAVO」では、自閉症を有する、あるいは行動障害をとまなう人たちを中心に、5名の利用者が、清掃活動に取り組んでいる。活動のマネジメントには、視覚化や構造化の方法を導入し、利用者への支援を展開させていくことにした。もちろん、最初からすべて上手くいった訳ではない。失敗もあった。しかしながら、支援者が利用者に学びながら試行錯誤を重ねていく過程が、乗馬クラブのオーナーをはじめ、スタッフや会員からの理解や評価を深めていくことにも繋がっていった。親睦をを図ることを目的に秋口に小さな交流会が企画された。10名程度のバーベキューパーティーである。そ

れから7年が経過した。秋の交流会は回を重ね、今では地域の方々にまで参加者の裾野は広がり、150名近い人たちが集うイベントへと成長した。

活動効果

発達障害のある人特有の精神症状が、時として様々な行動面の問題となって生起することは良く知られている。特に発達障害の中でも自閉症者に見られるような激しい自傷行為や破壊的行動などを強度行動障害と呼ぶ。しかしそれは、生まれもって備わった資質そのものではなく、不適切な対応や環境によって形成された諸症状を意味していることを、私たちは忘れてはならない。「BRAVO」で活動が続ける利用者也、ある種の“生きづらさ”を抱える人たちである。視覚的な手がかりや構造化の手法を応用して、環境と自分がどのような関係にあり、何を期待されているのかを明確にすることで、コミュニケーションや社会的スキルを補いながら、少しずつ、少しずつ、自分らしさと不安をとまなわせて、我々の世界（多数派の人たちにとって住みよい社会・共有しやすい文化）に歩み寄ってくれている。

「BRAVO」での実践を通じて思うことは、共感的に知る、理解しようというきっかけに気づくことで、周囲の人たちが強力な支援者に変貌を遂げるということである。清掃活動と小さな親睦会から出発した地域との交流は、障害理解の広がりとともに、“共生”のひとつのあり方を示してくれたのではないかと感じている。

今後の課題

「BRAVO」での取り組みは、利用者と支援スタッフが寄り添い、様々な局面を経ながらも周囲の理解者に支えられ、地域で小さくとも確かな歩みを続けている事例である。しかしながら他方、施設現場に目を移せば日々課題が山積していることも現実である。また、地域からは重い障害があるがゆえに、支援の仕組みが崩壊寸前の状況にありながらも、関係者の尽力によってぎりぎりのところで踏みとどまっているという、悲痛の声が聞こえてくることも事実である。専門性、支援力の向上が求められている。利用者から学ぶ姿勢を保ちながら、そして力量以上の覚悟とともに。

主な経費や財源の内訳（年間あたり）

<主な経費>	<概算額>
飲食代	¥227,988
出演者（演奏家等）への謝礼	¥50,000
装飾代等、雑費	¥6,590
行事保険	¥6,000
施設使用料	¥31,422
<合計>	¥322,000

<主な財源>	<概算額>
施設負担額	¥68,000
利用者負担額	¥22,000
その他の収入	¥232,000
<合計>	¥322,000

